

寒河江大江氏の惣持寺について (月光善弘)

寒河江大江氏の惣持寺について

月光善弘

目次

- 一、はじめに
  - 二、寒河江荘の成立と大江氏
    - (一) 撰関家藤原氏の所領
    - (二) 大江氏の入部と寒河江荘
  - 三、寒河江大江氏の仏教
    - (一) 菩提寺
    - (二) 祈願寺
  - 四、大江氏の滅亡後
    - (一) 最上氏の寺院政策
    - (二) 徳川幕府の寺院政策
    - (三) 惣持寺の末寺・門徒
  - 五、惣持寺の復飾
    - (一) 経済の破綻
- 
- 六、おわりに
    - (一) 明治維新と寺社領の上地
    - (二) 神仏分離と復飾
- 
- 図 1 … 寒河江荘位置図
  - 図 2 … 撰関家藤原氏の系図
  - 図 3 … 大江家世代系統図
  - 図 4 … 大江氏歴代法号及び没年
  - 図 5 … 惣持寺末寺配置図
  - 表 1 … 鎌倉時代～室町時代の慈恩寺の仏像・絵画
  - 表 2 … 惣持寺(本寺)の末寺・門徒支配関係一覧

一、はじめに

『寒河江市史編纂叢書』第24集(一)(柿本家旧蔵)<sup>(1)</sup>・第24集(二)(門末寺院記録)<sup>(2)</sup>・第24集(三)(柿本家旧蔵)<sup>(3)</sup>に、柿本家

の前身である旧惣持寺の文書が書写されている。書写した市史編纂委員会の委員長である阿部西喜夫氏は、「書写してみると殆んどが近世文書であったけれども、寺の性格を初め、大江氏との関係なども推察できるものであった。三十か寺を数える支配の末寺の所在も明瞭になって来た。」と述べている。

小納の寺も含めて現在真言宗智山派に所属する寺院が、長念寺をはじめ柴橋寺・光徳寺・実相院・善明院・光養寺・西光寺・妙法院・宝蔵寺・愛染院・西林寺・万福寺・福寿院・昌城院・安養院・洞光寺・円福寺・長松寺など、十八か寺院が江戸時代後期には惣持寺の門末であったことが、「惣持寺末寺配置図」(図5)によって知られる。

本稿では、前記の『寒河江市史編纂叢書』第24集(一)・(二)・(三)を中心とし、阿部西喜夫氏編著『寒河江大江氏』<sup>(4)</sup>、その他を参考にして、寒河江大江家の祈願寺として稻荷社を鎮守とし、大江家滅亡後は最上家、最上家改易の後徳川幕府から、御朱印高一八三石七斗四升を頂戴していた、三光山遮那院惣持寺の歴史的変遷の概略について述べてみよう。

註(1) 寒河江市史編纂委員会編集『旧惣持寺文書』(一九七八、三、二〇)。

(2) 同 右 (一九七九、三、二〇)。

(3) 同 右 (一九八〇、二、二九)。

(4) 阿部西喜夫編著『寒河江大江氏』(一九八八、一二、一)。

## 二 寒河江荘の成立と大江氏

### (一) 撰関家藤原氏の所領

撰関白藤原忠実の書いた日記「殿曆」<sup>(1)</sup>の競馬くらべうまに関する天仁二年(一一〇九)九月六日ならびに二六日の記事、さらに天仁三年三月二七日の条に、政府から任命された出羽守源光国が、国司の立場から忠実の所領である寒河江

## 寒河江大江氏の惣持寺について（月光善弘）

荘（図1参照）に乱入して、国衙領に収公しようとしたので、直ちに家来を遣して処置を構ぜよと命じた趣旨の記事がみられる。これらの記録によって寒河江荘は、撰関家藤原忠実の荘園であったことがわかる。

寒河江荘の成立について阿部酉喜夫氏は「寒河江荘が成立したのは一一世紀の中頃、即ち延久元年（一〇六九）以前で、今から九〇〇年前の平安中期となる。そして所有者は平安末期まで政権を握っていた藤原氏である。藤原氏は陸奥国の本良・小泉・高鞍、出羽国の寒河江・大曾根などの荘園を所有し、これらの荘園は一一―一二世紀の文書にみられる。したがって道長の子頼道、その子師実の頃には成立していたと思われる。このように寒河江の荘は、忠実までは「殿曆」によって、撰関家藤原氏の領地となっていたのである<sup>(2)</sup>。

忠実は久安四年（一一四八）、本良・小泉・高鞍・大曾根・屋代の五荘を、二男頼長に譲ったが、寒河江荘だけは譲らず自分の所領としていた。応保二年（一一六二）忠実が没し、長寛二年（一一六四）にはその子忠通も亡くなり、その遺領は嫡子基実に渡ったと思われるが、基実も仁安元年（一一六六）に没した。しかし恐らく寒河江荘は撰関家藤原氏の所領であったもの<sup>(3)</sup>と考えられる。

荘内の巨利である瑞宝山慈恩寺に、平安後期の仏像群があるのも、撰関家藤原氏の庇護によって安置されたものであることがわかる。したがって、それらは京文化の移入であったといえよう。

このように寒河江荘は一一世紀の中頃には成立し、撰関家藤原氏の所領となり、一二世紀末まで継続したものと推定される。しかし荘官のいた役所の成立・場所などについては不明であるといわれる。

### (二) 大江氏の入部と寒河江荘

寒河江大江氏は文治五年（一一八九）十一月、大江広元が寒河江荘を賜ってから、天正二二年（一五八四）六月、一八代高基が最上義光と戦って敗れるまで、約四百年間寒河江地方を支配した。一族が一地方を支配した記録としては、稀にみる長期政権であったといえる。

大江広元（一一四八～一二二五）は元暦元年（一一八四）の春、源頼朝に招かれて鎌倉に下り、幕府の政務補佐の命を受けた。そしてこの年八月、頼朝は公文所を設置してその別当すなわち長官に広元を就任させ、この役所は建久二年（一一九一）一月、政所と改められた。広元は奥州征伐の功によって文治五年十一月、寒河江・長井の両荘を与えられ、嘉禄元年（一二二五）六月一日、七八才で没したが、頼朝の武家政治の機構を整備して、頼朝を援け支えた人である。

現在慈恩寺に遺る仏像群の中に、鎌倉時代から室町時代まで大江氏統治のものが極めて多い（表1参照）。慈恩寺と大江氏との関係は密接で、大江氏から別当池本坊（後の最上院）に入った人は三名である。すなわち

- 1、文永八年（一二七一）、親広の孫成広、二三代を相続して幸繁と称した。
- 2、建徳二年（一三七一）、親広より七代元氏の男金剛丸が、別当坊三〇代を相続して幸海と称した。
- 3、応仁元年（一四六七）、親広より一二代為広の男又四郎、三五代を相続し幸道と改めた。<sup>(4)</sup>

このように大江氏は入部以来、大檀那として慈恩寺の庇護と発展に務めてきたのである。表1は大江氏入部以後、鎌倉時代から室町時代までの慈恩寺の仏像・絵画四四体の名称・員数・所在を表にしたものである。

註(1) 『大日本史料』三ノ一〇。

(2)・(3) 阿部酉喜夫編著『寒河江大江氏』四～五頁。

(4) 同 右 一七四頁。

### 三、寒河江大江氏の仏教

#### (一) 菩提寺

大江広元は嘉禄元年（一二二五）六月一日、七八歳で逝去したが、これより先、建保五年（一二二七）十一月

## 寒河江大江氏の惣持寺について（月光善弘）

一〇日、剃髪して覚阿と称する。また嫡男親広は承久元年（一二一九）正月二七日、右大将実朝が鶴ヶ岡八幡宮で公暁のため殺害されると、翌日直ちに剃髪して蓮阿と号した。<sup>(1)</sup> 広元の妻の父多田仁綱<sup>のりつな</sup>は、親広より先に寒河江荘に入り、本楯に館を構えるが、正阿と号したことが伝えられている。また親広の長男佐房<sup>すけむら</sup>は通阿、次男高元（寒河江二代城主）の法号は照阿、三男広時（寒河江三代城主）の法号は願阿、その子政広は行阿、五代元頭は順阿の法号である。<sup>(2)</sup> 阿字のつく法名は浄土系の寺院を菩提寺とする人の法号で、阿字は阿弥陀仏の阿とされる。六代の元政の法号は虚山宥利となつていたので、寒河江の大江家は五代元頭の没年である元亨二年（一三二二）まで、菩提寺は浄土系の寺院であり、六代の元政以後は禅宗に代つたものであろう（表2参照）。

初代親広は父広元の没後、亡き父を慕い広元を供養するために、鎌倉の仏師に依頼して木像阿弥陀仏像を造らせ、父の遺骨とともに厨子を作つて、西川町吉川の安中坊に奉安した。西川町吉川の阿弥陀堂跡は阿弥陀堂のあつた場所、阿弥陀屋敷という。現在は親広・仁綱の墓のほか、安中坊歴代の墓が祀られている。

以上より知られるように大江氏の菩提寺（滅罪寺）は五代元頭までは浄土系であり、六代元政以後は禅宗に代つたのであろう。元政は前述のように虚山宥利、七代時茂は養庵宥山、八代時氏は本岩真光の法号となつている。

九代元時の法号は宝幢寺殿大寧時公とあり、文安五年（一四四八）の没年で將軍足利義政の代である。一〇代元高は千手院殿大舟江公、一一代高重は本願寺殿照山光公、一二代為広は常泉院殿心識本公、一三代知広は澄江寺殿高嶽棟公、一四代宗広は法泉寺殿悦岩喜公、一五代孝広は陽春院殿大運永公、一六代広種は福泉寺殿陽岩春公、一八代高基は光学院殿松岩教公となつている。以上よりすると、九代元時からは一七代兼広を除いて、それぞれの世代で菩提寺を建立している。それらの中で澄江寺・法泉寺・陽春院・福泉寺は寒河江市内に、光学院は大江町内に現存し、曹洞宗に所属している。

## (二) 祈願寺

平安初期に抬頭した真言・天台の密教、ならびに密教系の修験道では、鎮護国家・領内安全・五穀豊饒・武運長久など、祈禱を主とする仏教の寺院で、前述のように個人の安心立命や菩提を弔う滅罪の顕教寺院（鎌倉仏教）とは宗教の社会的機能において異なっていた。

寒河江荘には平安中期頃から摂関家藤原氏によって整備された祈願寺院としての巨利瑞宝山慈恩寺があり、寒河江大江氏とも密接に結びついていたので、祈禱寺院の要請は急を要する問題ではなかったといえるのではなからうか。

ところが大江氏七代時茂の正平二四年（一三六九）、北朝方の斯波兼頼とその兄直持によって攻められ、漆川の戦で壊滅的打撃をうけて、一族六〇余人が自害した。この時七代時茂の子溝延茂信、その弟修理亮、左沢元時などが殉死した（図3参照）。四男時氏は病のため静養して吉川の館にあり、この難をまぬがれた。父時茂は漆川の戦の結果を聞いて、時氏に北朝方に和を乞うて降ることを遺言して亡くなった。時氏は父の遺言により北朝に降り、鎌倉の関東管領足利氏満（一三五九〜九八）から、本領安堵、一家正嫡の御教書をもらって事なきを得た。その条件として時氏の長男当時七才になる元時を鎌倉に人質として送った。こうして六代元政以来奥羽の南朝方として活躍した大江氏も、北朝方に降ることになったのである。時氏が吉川から寒河江に移ったのは、これから間もない時期であったと考えられる<sup>(3)</sup>。

寒河江城は初代親広の経営したものと伝えられる。多田仁綱が広元の目代として寒河江荘に入部した時は、本楯に館を築いたもので今もなおその一部を確認することができる。寒河江城の場合は本丸が東西六拾間三尺、南北八拾八間三尺で、館城の形式であった。時氏は吉川から寒河江本城に移り、親広の経始した館城に大修築を加えた。それは館を三の丸にまで拡張し、城としての形を整備したことを指す。

寒河江城はおおよそ正南北と正東西に構築され、二の丸北東隅に惣持寺が建立されている。陰陽道で丑寅（艮）

## 寒河江大江氏の惣持寺について（月光善弘）

は万鬼の出入する方角とし、鬼門と称して忌み嫌う。そのため鬼門除けとして、災難を避けるために神仏を祀るところが行なわれた。惣持寺はまさに寒河江城の鬼門にあたる二の丸の北東角に勧請された祈禱寺院なのである。その位置は築城計画の方位と一致しているもので、整然とした計画のもとに行われたことがわかる。そしてさらに三の丸には、この方位に薬師堂を配して二重の鬼門除けとした。

このように寒河江大江家の祈禱寺としての惣持寺の成立は、まさに八代時氏の寒河江城大修築の際であった。その時期は大江一族が正平二四年（一三六九）漆川の戦で敗れ、関東管領足利氏満から本領安堵、一家正嫡の御教書をもらってから間もない時期であった。<sup>(4)</sup>

惣持寺という名の寺は全国にかなりあるが、惣の字義は「すべる」、「ひきいる」の意味で、惣持寺は「すべ持つ寺」とか「ひきい持つ寺」の意味である。したがって格式の高い寺で、その下に多くの寺院を支配していることを前提としている。それで惣持寺は開創の時から、寒河江荘内同系寺院の本寺的性格を有していたものと考えられる。<sup>(5)</sup> 南北朝末から室町初期にかけての大江氏領内祈願系統寺院については明確でない。江戸時代における惣持寺配下の寺院は三〇か寺で、これらを統括する寺が惣持寺であった（惣持寺末寺配置図参照）。しかもそれは河北を除き寒河江荘内全域にわたっていた。とくに人家もまれな山間部に配下の寺院があったのは、領内防備態勢の政策的な配置と考えられる。すなわち領内安全のための祈禱寺としての性格に、軍事的性格もあわせ備えたものであると思われる。<sup>(6)</sup> それには修験の寺院が最適であったと言い得よう。それが江戸時代になって真言宗の智山派に編入する要因ともなったと考えられる。

惣持寺の開山は真済僧正（八〇〇〜八六〇）とされるが、九世紀初に惣持寺が開創されたとは考えられない。また寒河江八幡宮の神宮寺も真済僧正開基となっているが、八幡宮は鎌倉時代の建久二年（一一九一）の勧請なので合わない。さらに惣持寺配下の二十数か寺の寺院は、開山開基が不詳とされる。このことは寺院創立の要因が前述

のように、大江氏が政策的に修験者を領内に配置したことによるものではなからうかと考えられる。

註(1)・(2) 阿部西喜夫編著『寒河江大江氏』一三四頁。

(3)・(4)・(5)・(6) 『寒河江市史編纂叢書』第二四集(一)一頁・二頁・三頁。

#### 四、大江氏の滅亡後

##### (一) 最上氏の寺院政策

天正一二年(一五八四)六月、大江氏一八代高基が最上義光と戦って、貫見御楯山上で自害し大江氏は滅亡した。大江氏にとって代った最上氏は、きわめて緩かな鎮撫政策をとり、寺社に対する処遇なども、大江氏支配時代そのままに黒印地として認めている。

文久二年(一八六二)、洲崎の菅井弥五平の書いた「寒河江秘鑑」の中に、「稻荷神社領高百八拾三石七斗四升惣持寺」とあり、そのほか全部で八二筆、石高にして一七三九石六斗六升、これに慈恩寺を入れると四五五石九斗六升となっている。<sup>(1)</sup>

##### (二) 徳川幕府の寺院政策

徳川氏の寺院政策は整然たる法度をもって規定した。したがって諸宗諸寺が一つの規律のもとに統制されることになった。しかし惣持寺の場合は、江戸時代以前、本寺末寺の関係をもつ統制が、大江氏によって作られていたから、江戸時代初期に幕府の宗教統制が始まると、そのまま統制の組織の中に入ったものと推定される。<sup>(2)</sup>

関東新義真言宗は慶長一八年(一六一三)、徳川家康・秀忠から法度が下ってその庇護を受け、これに先立って慶長一五年には江戸四か役寺(愛宕山円福寺・愛宕山真福寺・本所弥勒寺・湯島知足院―貞享四年七月以降根生院)が、新義一派の触頭職を仰せ付けられた。この四か寺には諸国がその配下に属し、たとえば弥勒寺は陸奥、出羽、



## 寒河江大江氏の惣持寺について（月光善弘）

越後、下総の四か国の新義真言宗を支配していた。惣持寺の記録も以上の四か寺との関係のものが多い。それらを見ると四か寺は新義一派の総支配であり、末派寺院の取締りを行ったものである。宝曆一二年（一七六二）正月、役寺から寺社奉行所に提出した文書「新義真言宗触頭取捌之覚書」を見ると、

「上方本寺等惣て大本寺にては末寺支配不<sub>レ</sub>致候事

一、前々より度々御奉行所之書付を以申上候通、真言宗は就<sub>ニ</sub>教相<sub>一</sub>新義、古義両派相分、古義は高野山無量院・

宝生院両学頭の会下にて住山留学仕候、新義は小池坊・智積院両能化の会下にて住山留学仕候得ば、修学の流派相違、其人品器量等も相互に不<sub>レ</sub>得候ては世出世の支配難<sub>レ</sub>成御事

一、御室・嵯峨・東寺・醍醐等の諸山は事相の本寺にて、教相修学の僧侶御存知無<sub>ニ</sub>御座<sub>一</sub>候得ば、世出世の支配難<sub>レ</sub>成御事

一、智積院・小池坊は新義の惣本寺学頭職に御座候得共、諸国の末寺公儀御触等御用の儀は勿論、右両山末寺支配は江戸四ヶ寺にて相勤来り候<sup>(3)</sup>

とあり、触頭四か寺は新義一派の総支配職であり、末派寺院の取締りを行ったものであることがわかる。

(二)惣持寺の末寺・門徒

諸国の大寺には能化（教える僧）が居住し、多くの所化（教えられる僧）を養成し、談義所（後に談林所）と呼ばれ、本寺と称するようになる。惣持寺も寒河江城の二之丸の東北角に、稻荷神社領として百八拾三石七斗四升の御朱印を頂戴し、旧寒河江町内の寺社領としては最高であり、旧大江家領内では本寺格の寺院で、宝曆一二年（一七六二）には末寺七か寺、門徒一八か寺、廃寺四か寺を支配していた。末寺とは所化の住する寺院を称したが、後には本寺から法流を相承した寺院を末寺と称し、法流を相承しない寺院を門徒と呼ぶようになった。しかし末寺、門徒の呼び名があるのは関東管轄寺院に限られていた。惣持寺に末寺、門徒のあるのは、そのためであるとされる<sup>(4)</sup>。

門徒は本寺から法流の印可をうけていないので、出家授戒の戒師・四度加行の伝授・檀家の葬儀の引導を行うことが禁ぜられ、衣は黒衣に限られ色衣の着用はできなかった。門徒が末寺に昇格するには法流を相続して印可を受け、相当の祠堂料を納入し、本寺、同門連印の上、江戸四か寺に願ひ出れば、吟味の結果許可が与えられた。新義真言宗の門徒は、浄土真宗の在俗信者またはその集団を呼ぶ門徒とは異なるのである。

註(1) 『寒河江市史編纂叢書』第二四集(一)五頁。

(2) 同 右 六頁。

(3)・(4) 同 右 七頁・八頁。

## 五、惣持寺の復飾

### (一) 経済の破綻

配下に三十か寺を有する格式の高い本寺であったが、格式を維持するために江戸出府が多く、その費用は一八三石余の御朱印では賄い切れなかった。二三代の嚴栄の頃から寺院経営が困難となったが、二六代の亮宏(泰寿房)は不行跡のため、さらに経営が困難となった。<sup>(1)</sup>

### (二) 明治維新と寺社領の土地

慶応四年(一八六八)四月二一日、領内の御朱印所持の寺社の者を惣持寺に召集して、御朱印没収の申渡しを行なった(東林坊文書「細小路契約帳」)。しかし実際に没収が行なわれるのは、明治三年のことで、この年八月には瑞宝山慈恩寺を初めとして、大小の寺社の御朱印地を返上している。明治政府は御朱印地に対して境内を除くほかは全部上地を命じ、旧領の額にに応じて通減禄を支給することによって御朱印地を解消した。<sup>(2)</sup>

### (三) 神仏分離と復飾

## 寒河江大江氏の惣持寺について（月光善弘）

明治政府は明治元年三月二七日、太政官布告で神仏判然令を出し、翌二年版籍奉還によって寺社領の上地を命じた。三光山遮那院惣持寺の三代住職亮融は、明治三年九月寺院経済の破綻や時代の流れにしたがい寺を廃し、一八三石余の御朱印の付いていた境内にある稻荷社の神主となって神職に復飾した。惣持寺が真済僧正開基と伝えられることから柿本姓を名乗ったが、真済僧正は柿本僧正とも称せられたことによるものである。名を音人と改め、また亮融の一字をとって融とも称した。亮融三三才の時である。<sup>(3)</sup>

柿本音人は明治二七年六月、第三代の寒河江町長となり、同二九年二月までその職にあり、同年町長の職を辞し、同三〇年一〇月二七日病のため没した。齢六〇歳であった。廃寺にあたって仏器具・什物類の譲渡目録は、末寺筆頭の知事職であった長念寺に現在保管されている。惣持寺配下の寺で廃寺となった寺は、満徳院・月山寺・実相坊の三か寺であった。惣持寺に残った二千数百坪の境内は、柿本家の所有となり、境内に残った供養碑・墓石類の一部は、長念寺境内や墓地に移された。<sup>(4)</sup>

註(1) 『寒河江市史編纂叢書』第二四集(一)一〇頁。

(2)・(3)・(4) 同右、同 一一―一三頁。

## 六、おわりに

寒河江荘は一一世紀の中頃には成立し、平安中期から末期まで撰関家藤原氏の所領となったと思われる。荘内の巨刹である瑞宝山慈恩寺に、平安後期の多くの仏像群が存在することが、そのことを立証している。鎌倉時代の文治五年から一八代におよぶ約四〇〇年に亘って、寒河江大江氏が統治し、慈恩寺は大江家と密接な関係を結び、東北地方において最高の寺領を頂戴して、一山寺院を形成してきた。

寒河江大江氏の仏教信仰を見ると、菩提寺は初代より五代までは浄土系の寺であったが、六代からは禅宗（曹洞

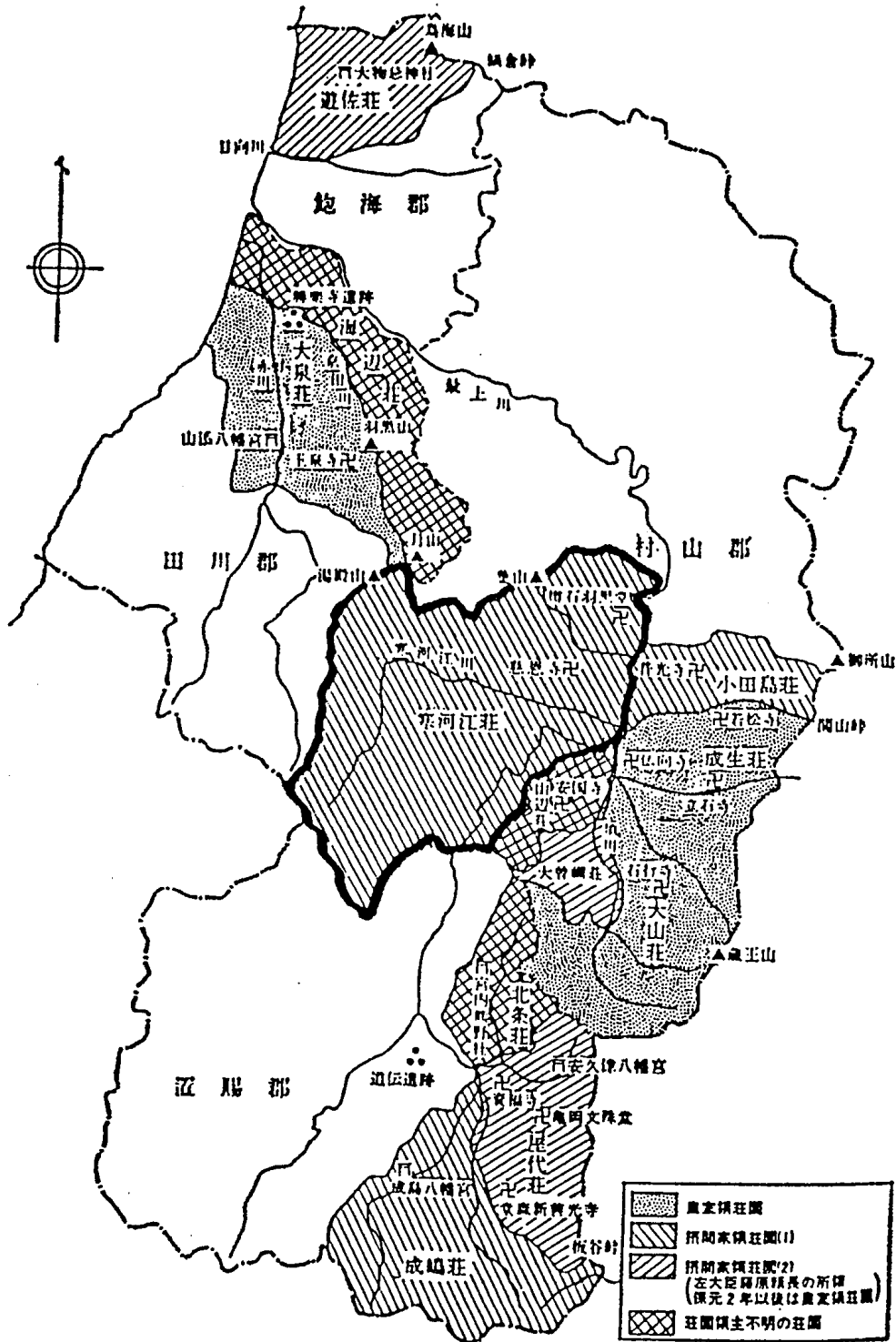
宗)となっている。祈願寺としては荘内に慈恩寺がある関係で明確でなかったが、八代時氏の寒河江城大修築の時に、二の丸の北東角(鬼門)に鎮守社として稲荷社が奉祀され、その別当に三光山遮那院惣持寺が勧請された。この寺が本寺となり三〇か寺を統轄する寺となるが、配下の寺院は河北を除く寒河江荘内全域に亘り、領内安全の祈願と防備を兼ねた修験寺院も、かなり包含されていたものと考えられる。

大江氏の滅亡後は山形最上氏の所領となったが、惣持寺領はそのまま黒印地として認められ、最上氏の改易後は幕領となり、稲荷神社領として一八三石七斗四升の御朱印を頂戴し、旧寒河江町内の寺社領としては最高であった。旧大江家領内では本寺格の寺院で、宝暦一二年(一七六二)には末寺七か寺、門徒一八か寺、廃寺四か寺を支配していた。

このように配下に三〇か寺を有する本寺としての惣持寺も、その格式を維持するための寺院経営が困難であり、明治維新の神仏分離に際しては、三一代住職の亮融が稲荷社の神主となって復飾し、柿本音人と名乗り三代の寒河江町長を務めた。廃寺の時に仏器具・什物類の譲渡目録は、末寺筆頭の知事職であった長念寺に保管され、惣持寺の二千数百坪の境内は柿本家の所有となったのである。

寒河江大江氏の惣持寺について (月光善弘)

図1 寒河江荘位置図



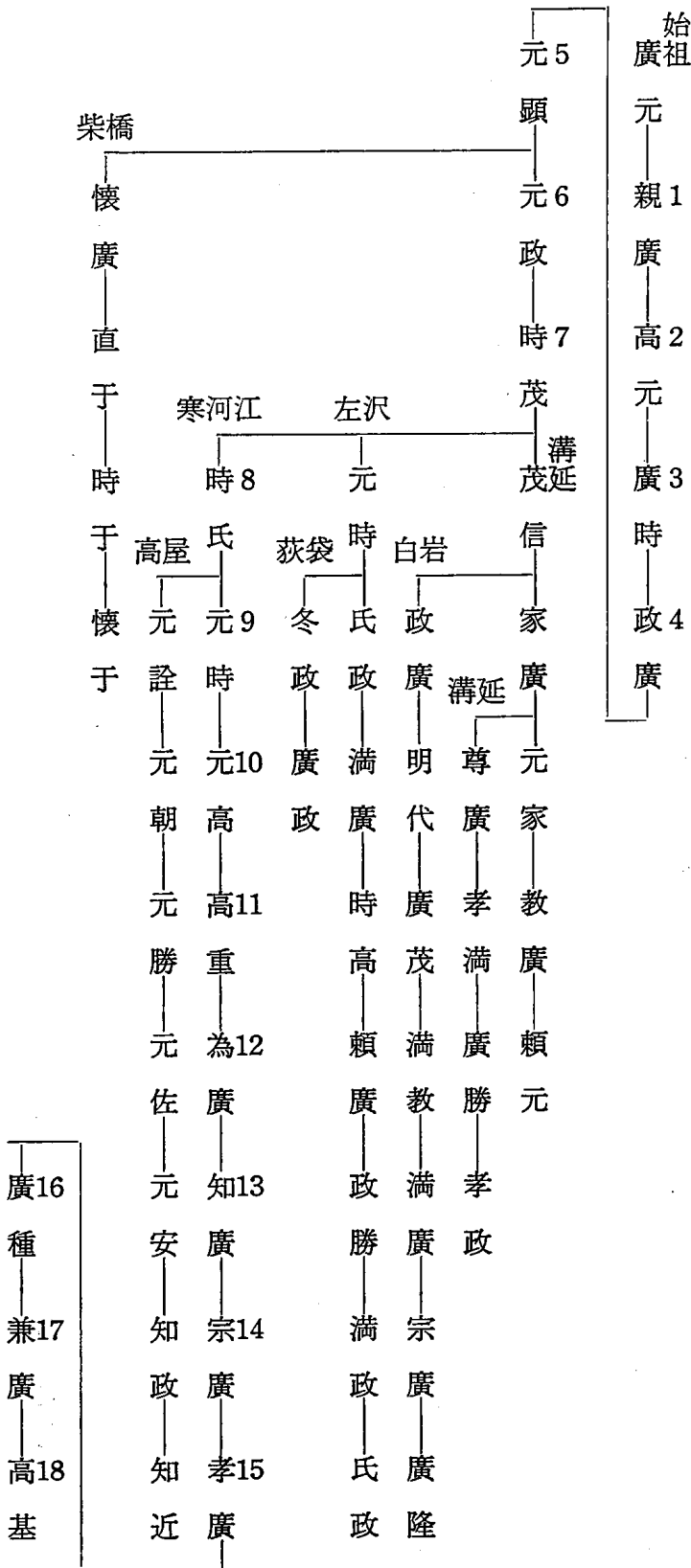
備考 『山形県史』第一巻の図179「荘園分布図」(保元元1156年当時)を借用した。

図2 摂関家藤原氏の系図



〔備考〕 この系図は『寒河江大江氏』四頁に掲載のものを借用した。

図3 大江家世代系統図



〔備考〕 この図は寒河江大江氏の歩み―大江公歴史資料展図録―四〇頁に掲載のものを借用した。

## 寒河江大江氏の惣持寺について（月光善弘）

図4 大江氏歴代法号及び没年

代数	名 前	法 号	没 年	西 曆
○ 始祖	廣 元	覺 阿	嘉禄1年6月10日	1 2 2 5
○ 1	親 廣	蓮 阿	仁治2年12月15日	1 2 4 1
2	高 元	照 阿	建長6年7月10日	1 2 5 4
3	廣 時	願 阿	弘長2年8月4日	1 2 6 2
4	政 廣	行 阿	建治3年6月15日	1 2 7 7
5	元 顯	順 阿	元亨2年3月18日	1 3 2 2
6	元 政	虚山宥利	正平14年5月	1 3 5 9
7	時 茂	養庵宥山	文中2年5月8日	1 3 7 3
8	時 氏	本岩真光	元中8年9月10日	1 3 9 1
9	元 時	宝幢寺殿大寧時公	文安5年4月15日	1 4 4 8
10	元 高	千手院殿大舟江公	長禄1年12月	1 4 5 7
11	高 重	本願寺殿照山光公	不 詳	
12	為 廣	常泉院殿心識本公	文明18年9月8日	1 4 8 6
○ 13	知 廣	澄江寺殿高嶽棟公	明応3年7月28日	1 4 9 4
○ 14	宗 廣	法泉寺殿悦岩喜公	永正1年7月1日	1 5 0 4
○ 15	孝 廣	陽春院殿大運永公	大永7年2月1日	1 5 2 7
○ 16	廣 種	福泉寺殿陽岩春公	天文15年12月24日	1 5 4 6
17	兼 廣	治天広心	天正6年6月8日	1 5 7 8
○ 18	高 基	光学院殿松岩教公	天正12年6月28日	1 5 8 4

注 ○印は安中坊系図による。

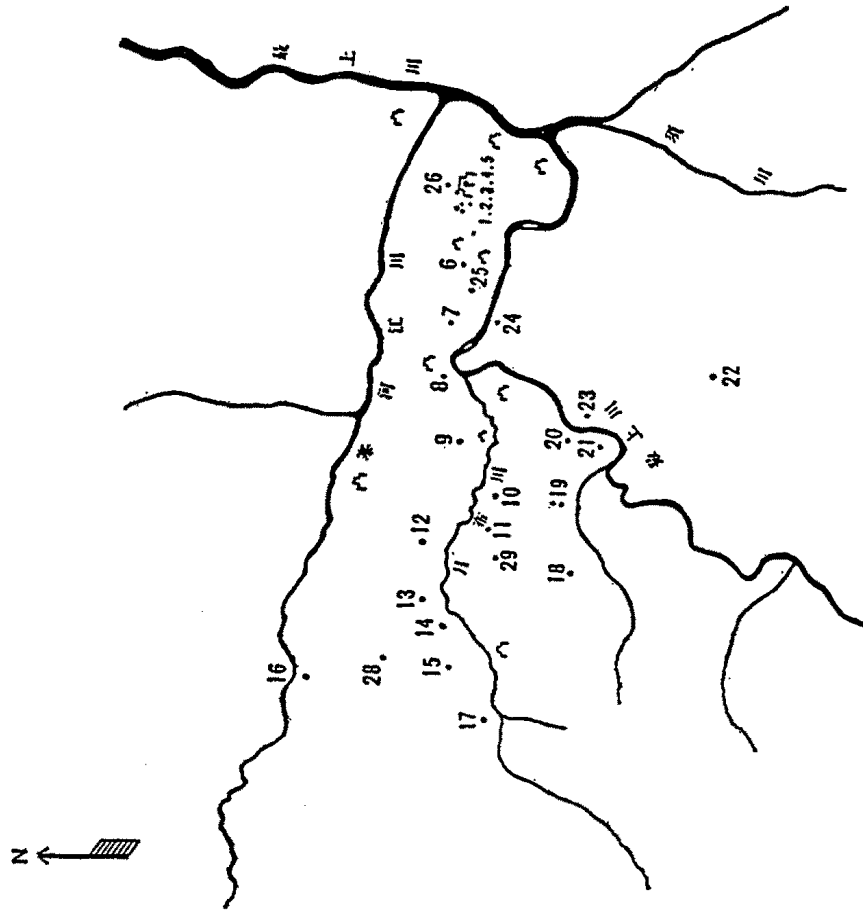
その他は和田市雄「寒河江古城主系譜」によるが、没年の根拠が不明である。

〔備考〕 この図は『寒河江大江氏の歩み』一前掲書一41頁掲載のものを借用した。

図5 惣持寺末寺配置図

1 : 50,000

(この図は『寒河江市史編纂叢書』第24集(-)の図版4である)



○印末寺外門徒

数字26までは江戸時代後期廻状順路

門末廻状順路

本寺	惣持寺	寒河江 二の丸	10	光養寺	塩平	20	福寿院	中沢
①	長念寺	寒河江 三の丸	11	西光寺	所部	21	昌城院	左中
②	月山寺	寒河江 楯西村	12	来迎寺	小新	22	長福寺	湯船 (北山)
③	満徳院	寒河江 楯西村	13	妙法院	楯山	23	安養院	深沢
④	神宮寺	寒河江 楯西村	14	宝蔵寺	月布	24	洞光寺	中郷
⑤	実相坊	寒河江 楯南村	15	黒森寺	黒森	25	円福寺	金谷原
⑥	柴橋寺	柴橋	16	愛染院	入間	26	長松寺	西根
⑦	光徳寺	松川	⑰	西林寺	沢口	27	蓮蔵坊	潰寺
⑧	実相院	左沢	18	万福寺	大暮山	28	妙勝院	外大谷
9	善明院	北山	19	白山寺	大谷	29	久光寺	如来寺



## 寒河江大江氏の惣持寺について（月光善弘）

表1 鎌倉時代～室町時代の慈恩寺の仏像・絵画

時代	名称	員数	所在
鎌倉前期	阿弥陀如来立像	1	本堂
	二天王立像	2	堂宮殿
	力士立像	1	//
	十二神将立像	12	薬師堂
	阿弥陀如来立像	1	宝徳寺
鎌倉後期	弥勒菩薩坐像（永仁6年）	1	本堂宮殿
	釈迦如来坐像（//）	1	//
	地藏菩薩坐像（//）	1	//
	不動明王立像（//）	1	//
	降三世明王立像（//）	1	//
	如来立像	1	//
	菩薩立像	2	//
	観音・勢至菩薩立像	2	//
	軍荼利明王立像	1	//
	男神立像	1	//
	聖観音菩薩立像	1	本堂
	弥勒菩薩坐像	1	//
	虚空蔵菩薩坐像	1	//
	聖徳太子立像（正和3年）	1	//
	薬師如来坐像	1	薬師堂
	日光・月光菩薩立像	2	//
	大日如来坐像	1	三重塔
不動明王立像	1	不動堂	
弘法大師画像	1	本堂	
愛染明王画像	1	宝蔵院	
南時北朝代	阿弥陀如来坐像（宝冠弥陀）	1	阿弥陀堂
	弥勒菩薩坐像	1	本堂宮殿
室時町代	弥勒菩薩坐像	1	本堂宮殿
	阿弥陀如来坐像	1	本堂
計		44	

注 (1) 表は大江時代の鎌倉～室町のものに止めた。

(2) この外、平安時代後期のものが16体ある。

(3) この表は「羽陽文化」第116・117号慈恩寺特集号麻木脩平氏論文を参考とした。

備考 この表は『寒河江大江氏』172頁に掲載されているものを借用した。

門徒支配關係一覽（年度別）

17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	順廻路状
西林寺	愛染院	黒森寺	宝蔵寺	妙法院	来迎寺	西光寺	光養寺	善明院	実相院	光徳寺	柴橋寺	実相坊	神宮寺	満徳院	月山寺	長念寺	寺号
沢口村	入間村	黒森村	月布村	檜山村	小新村	所部村	塩平村	北山村	左沢村	丸竹村	柴橋村	楯南村	楯西村	楯西村	楯西村	楯北村	所在
末寺	門徒	門徒	門徒	門徒	門徒	門徒	門徒	門徒	末寺	末寺	門徒	末寺	末寺	末寺	末寺	末寺	末寺 宝曆十二年 末寺門徒
全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	末寺	全上	全上	全上	全上	全上	末寺門徒 天明六年
全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	末寺門徒 文化元年
全上	末寺	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	末寺門徒 天保三年
寛保元年以降末寺	文政十二年以降末寺	文化九年二月焼失						嘉永三年亮程代末寺		御朱印十三石五斗 阿弥陀堂領		御朱印五石六斗 新山権現社領	御朱印二十六石七斗 阿弥陀堂領	御朱印三十八石五斗余 八幡社領	御朱印五十二石五斗余 月山権現社領	御朱印七十二石四斗余 観世音社領	摘要

借用した。

## 寒河江大江氏の惣持寺について（月光善弘）

表2 惣持寺（本寺）の末寺・

5	4	3	2	1	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18
式部郷 (地藏院)	三光坊 (三太志)	松本坊	明覚坊	大乘院 (日光院)	如来寺	妙勝院	久光寺	蓮蔵坊	長松寺	円福寺	洞光寺	安養院	長福寺	昌城院	福寿院	白山寺	万福寺
楯西村	楯西村	石川村	楯西村	楯西村	大谷村	小柳村	材木村	楯北村	石川村	金谷原村	中郷村	深沢村	湯船村	左中村	中沢村	大谷村	大暮山村
支配	支配	支配	支配	支配	記載なし	廃寺	廃寺	廃寺	門徒	門徒	門徒	門徒	門徒	門徒	門徒	門徒	門徒
全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上
全上	全上	全上	全上	全上	潰寺	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上
全上	全上	全上	全上	全上	記載なし	全上	全上	全上	末寺	全上	末寺	全上	全上	全上	全上	全上	全上
西町陽春院地藏堂管理 御朱印十二石一斗地藏領	上西小路(福泉寺門前)	西根にあり(長松寺向) 御朱印十九石鹿鳥明神社領	上小路にあり御朱印六石 八幡社神楽領	西町にあり御朱印四十四石 八斗余 月山権現社領	文化元年人別改に記載ある のみ	元禄十年文書に黒森寺兼任 願書			天保三年亮致代末寺								

〔備考〕 この一覧表は『寒河江市史編纂叢書』第24集(一)の232~234頁に掲載のものを